

オクサス学会紀要 2

OXUS Study

- 古代ホラズム王国の遺跡とウズボイ河流域についての報告…………… 1
Report on the Archaeological Sites of Ancient Khorazm
and the Valley Basin of the Uzboy
加藤まゆみ Mayumi Kato
- 大パミール源流域を訪ねる…………… 21
To the Headwaters of the Great Pamir River
本多海太郎 Kaitaro Honda
- ワハン下流部の遺跡について…………… 31
The Ancient Ruins of Lower Wakhan
井手マヤ Maya Ide
- イスラーム時代初期および中期におけるオクサス川流域の歴史地理 …… 45
On the Historical Geography of the basin of the Oxus
山内和也 Kazuya Yamauchi
- イッシククル湖面下の秘密と神秘…………… 63
The Mysteries in the Depth of the Lake Issik-kul
V.M. プロスキーフ V.M.Ploskih, S.V. プロスキーフ S.V.Ploskih,
V.V. プロスキーフ V.V.Ploskih 古曳正夫訳 Masao Kobiki
- 最近発見されたバクトリア語文書・碑文とその歴史的意義…………… 71
Recent Discoveries in the Bactrian Language and their Historical Significance
ニコラス・シムズ = ウィリアムズ Nicholas Sims-Williams
- 【言い出しっぺは誰?】 Who said it first? …………… 80
岩本博安 Hiroyasu Iwamoto
- 【「倭」への馬の渡来】 Horse introduction to WA …………… 82
田口計介 Keisuke Taguchi
- ギリシア記 (1) アバイ旅遊 (2) 妖しき楽の音…………… 85
Discription of Greece (1) Wandering Journey to Abai
(2) Enchanting melody of Orpheus
前田耕作 Kosaku Maeda
- ◆ 彙報 ◆…………… 58
- ◆ オクサス学会入会案内・会則 ◆ …………… 96

ワハン下流部の遺跡について

The Ancient Ruins of Lower Wakhan

井手マヤ (いでまや)
Maya Ide

The Wakhan Corridor as the "most direct thoroughfare" (A. Stein) between the fertile plains east of Iran and the oasis of the Tarim Basin in China, was instrumental in spreading Zoroastrianism, Nestorian Christianity, Buddhism and Islam to China in ancient times.

This paper reviews the observations of O. Olufsen and Aurel Stein with respect to three major sites of archeological interest, Kah-Kah Fort, Zamr-i-atish -parast" and the ruins of a "Buddhist monastery" in Vrang. The paper also introduces some contemporary research which claim that the Pamiri branch of the Ismaili sect of Islam retains the influence of Zoroastrianism and Buddhism to this day.

はじめに

ワハンの西の起点は現タジキスタン領とアフガニスタン領の両方にある同名の町イシュカシムであり、その最東端はアフガニスタンと中国との国境をなすワフジール峠である。このワフジール峠には氷の洞窟があり、そこから流れ出る雪解け水こそが古代にはオクサスと呼ばれ、現在はアム・ダリア（川）と呼ばれる川の源頭である。

ワハン渓谷は全長が約 350km、渓谷の幅は狭いところで 13km、もっとも広い中央部では 65km である。ワハン渓谷は大パミール渓谷、小パミール渓谷、

そしてワハン下流部の三つの地域に分けることができる。

大パミール川はタジキスタン領内のゾル・クル（湖）から流れ出ている。これが大パミール渓谷をなす。一方、アフガニスタン領内では、ワフジール峠から流れ出ているワフジール川が途中からワハン川または小パミール川と呼ばれ、小パミール渓谷を形成する。この二つの川、すなわち北側の大パミール川と、南側の小パミール川はランガル（昔のカライ・パンジャ）で合流し、パンジ川となる。その合流する地ワハンの西の起点、イシュカシムよりヒンドウクシュを望む





夏季、小パミール の入口、サルハド方向をランガル背後の岩絵のある山から望む



冬季、ソング付近からサルハド方向を望む



対岸のアフガニスタンの様子。花嫁行列か

点から西のイシカシムまでをワハン主流部、ないし下流部と呼ぶ。パンジ川の流れはイシカシムで北に変わる。川が屈曲している地点以北の谷はもはやワハンでは呼ばない。ちなみに、パンジ川はタジキスタン南部でワフシュ川と合流し、アム・ダリアとその名は変わる。

ワハン回廊の内、タジキスタン領内のランガル周辺が、またアフガニスタン領内ではサルハドが人間が定住できる限界である。ワヒ語を母語とするワヒ族（パミーリとタジクでは呼んでいる）が主に下流部に定住しているのに対し、上流部では主にキルギス遊牧民が暮らしている。ワハン下流部では背後の山から清流が流れ、また標高がさほど高くないので、厳しい気候条件下であっても、定住地としては適している。

ワハン下流部は、全長が約 111km、ヒンドウークシュ山脈の内、パキスタンとの国境までの地帯を入れるとその幅は 13km から 25km、西の入り口ではおよそ 18km である。川幅は季節にもよるが、広いところで 2km、狭いところで 20m である。ワハン下流部の標高は 2500m のイシカシムを起点に徐々に高くなり、ランガルでほぼ 2810m である。



ワハン概念図

タジキスタン領内のワハン渓谷下流域はアフガニスタン側と比較して、平坦地が少ない。アフガニスタン側ではヒンドークシュからパンジに流れ込む川は距離が長く、谷も大きく、末端の沖積扇状地は広い。タジキスタン側では北背後のシャフダラ山系はより浅く、非常に乾燥している。集落はパンジ川と背後のシャフダラ山系の切り立った崖に挟まれた僅かな平地や段丘上に位置している。

したがって本来はパンジ川の左岸、現在のアフガニスタン側の方が耕作地は多く豊かであるはずだ。そのことは古代の記録からもうかがえる。たとえば、唐の玄奘が刊『大唐西域記』の中で達摩悉鐵昏駄多国、(ワハン)の首都が昏駄多(ハンドウト、Khandut)であると書いているが、その所在地は現在でもパンジ川の左岸最大の集落であるハンドウト村であることが定説となっている。また19世紀まではランガルの対岸のキラ・パンジがワハンの行政の中心地であったことから左岸の優位性が伺える。

しかし、現在ではワハンの様子は様変わりし、パンジの右岸(タジキスタン)の方が人口がより多く、生活水準が高い。これは70年間に及んだソ連時代、道路、教育、医療の面で様々な恩恵を受けたためであることを認めざるを得ない。その一方で、対岸のアフガニスタンと言えば現代にいたっても戦禍に苦しむ、世界最貧国の一つにとどまり、対岸に見えるアフガン住民の生活水準は遥かに低い。

タジキスタン領であるパンジの右岸では、平地に恵まれたランガル村やヴラング村では人口も多く一面大麦、小麦などの栽培地が広がる。一方、ダルシャ



手前のタジク側は良く耕された耕地。対岸のアフガニスタンの扇状地はより広いが無人である

イ村からパンジ川屈曲点に近いナマドガット村にかけては、川幅は30mに狭ばまり、枝尾根が張り出しているために、集落は河岸段丘の上に建つ。そうした村では山の斜面にそって、杏子、リンゴなどの果樹園に囲まれたロシア式の白く外壁を塗った西洋風住宅が建ち並び、ワハンの景観を一層引き立てる。ナマドガット村より以西イシュカシムまではパンジ川は再び広くなり、平地も広がる。

古代よりワハン下流部は東西交流の恩恵を受け、比較的豊かであった。アムダリア下流部(現在のウズベキスタンやトルクメニスタン)の肥沃な地域と中国のターリム盆地のオアシスを結ぶ「もっとも直線的な」(スタイン)な交通路として重要な位置を占めていたからである。そのことを物語っているのは数多く残る岩絵や墓地、城塞建築である。実際ワハン下流部の村々はほぼ等間隔に配置されているように、年代不詳の古城も等間隔に建てられている。これら城塞跡はワハンの欠かすことの出来ない風景の一部となっている。どれもパンジ川の渡河点や対岸の谷筋、あるいは背後のシャフダラ渓谷へ通じる谷筋を監視できる位置に建っている。

19世紀以降ワハン回廊を通過した西欧人探検家は多い。しかし、ワハンの古代遺跡を調査したのはわずかに1890年代のオルフセン率いる第一次・第二次デンマーク調査隊とオーレル・スタインの二例のみである。ソ連時代、この地域の考古学的調査が開始されたのは1946年以降である。

スタインの調査以降、約半世紀に渡ってワハンの考古学調査が途絶えていたことを間接的に示唆して



カーカー・フォート 北側からみたところ。背後の山はアフガニスタン。

いるのがブブノワ博士の論文「パミールの考古学」である（『アイハヌム 2012』、加藤九祚訳、頁 51 - 82）。1946 年から 1985 年までの、パミールにおけるソ連隊の発掘成果を纏めているこの論文の中の一節がそのことを物語っている。

「ババエフは全く違った立場から西部パミール（ワハン下流部）の城塞を研究した。かれは 1958 年、1960 - 1963 年に調査した。かれはカーカー（カーカー城）とヤムチユンの城塞プランを修正した。この修正は必要であった。ベルンシュタムとゼリンスキーは 20 世紀初頭の A. スタインのプランを使っていたからである。」（『アイハヌム 2012』、頁 64）

さて私は 2005 年夏、2006 年夏、2008 年冬と 3 回にわたりワハン渓谷経由でパミールの最奥部まで旅行した。ここではワハン下流部で視察出来た城塞施設の内、特徴的なものを三つ紹介し、それらの由来に関する民間伝承の中で必ず登場する反イスラム異教徒、シアポシュ（Siaposh）族について紹介する。

遺跡の計測データ、その特性、伝説上の由来などについてはオルフセン率いるデンマーク隊の調査報告書 "Through the Unknown Pamirs" 1904 の英語版、

スタインのワハン調査報告 "Innermost Asia" Vol .2 1928、そして前掲の『アイハヌム 2012』にもとずいて本稿を書いた。

オルフセン率いる第一次デンマーク・パミール調査隊は 1896 年 3 月から一年間、第二次調査隊は 1898 年 3 月から 9 か月間、併せて 1 年 9 か月間、ワハン下流部の地理、言語、民族、経済、史跡などについて調査した。ワハン下流部が包括的な調査対象となった初めての事例ではないかと思われる。その成果が "Through the Unknown Pamirs" である。

スタインは主に下流部ワハンを調査したのは、1915 年 8 月 30 日から 9 月 6 日までの 8 日間である。この年スタインは 1913 年以來 2 年間取り組んだターリム盆地の発掘調査を終え、大きな成果を上げていた。スタインはカシュガルで出土品をインド宛てに送り終えると、1915 年 7 月に帝政ロシア領内のパミールへ向けて出発し、アライ渓谷のダラウト・クルガンから現在のタジキスタン領内のパミール西部、当時まだ地理学的な空白地帯であったフェドチェンコ氷河付近の難しいルートでアリチュールに抜けている。これがいかに先駆的な偉業であったかを当時気が付いていなかったのか、後にスタイン

村名	区間距離	遺蹟名
イシュカシム	0km	
ナマドガット	15km	カーカー城 (カーファ) Sha-i-Mardan Hazrati Ali 廟
ダルシャイ	25km	
ヤムチュン	30km	ザミール・イ・アタチシュ・パラ スト城、ズルコマール拝火教徒の 城 対岸にハンドゥート
ヤム	5km	スーフィー聖者廟、博物館、ソー ラーカレンダー
ヴラング	7km	拝火教台、仏教僧院址、小さい博 物館、寺院、洞窟式僧坊
ウムブ・カラ	4km	軍事施設立ち入り禁止
ゾング	22km	Abrahim Kala 絹の城、古代中国の見張り塔、ゼ ンジパール城、岩絵
ランガール	5km	6000の岩絵
ラトム	4km	ラトムフォート(城塞)

ワハン下流部の主な遺蹟

はこの空白地帯で測量作業をしなかったことを非常に悔しがっている。(ロシア当局から測量許可が与えられなかったことが原因であるとも書いている。)

スタインはアリチュールからはゾルクル経由でワハン上流部に入り、さらにドシャンベに出るまで、パンジ川に沿った全ての谷筋と、それらを結ぶ峠を走破するなど、見事にパミールを歩きつくした。スタインはこの旅行の詳細を、ターリム盆地の調査報告と合わせて "Innermost Asia" 全5巻として出版した。後に中央アジアにおける発掘調査の成果を一般読者向けに纏めた "On Ancient Central Asian Tracks" の和訳は『中央アジア踏査記』(沢崎順訳、白水社1966年)として日本で出版されている。なお1906年スタインはワハン回廊の最東端ワフジール峠からサルハドまでの小パミールも踏査しているがその成果は "Serindia" 1921 に書かれている。

ワハンの城塞施設

上に掲げた表がタジキスタン領内のワハン回廊の西の起点であるイシュカシムからワハン下流部最後の集落であるラトムまでの集落名とその周辺に残る城塞名の一覧表である。下流から順に私が直接視察できた城塞跡の内、カーカー城、ヤムチュン城とヴラングの仏教遺跡の様子を紹介しよう。

カーカー城

ワハンの西の玄関口イシュカシムから約15km南



ハズラット・アリ廟

東に行くと、パンジ川屈曲点付近のナマドガット村に到着する。すると川沿いに規模の大きいカーカー城が目に着く。現在でも機関銃を持ったタジク兵が城壁の中からあたりを監視しているのも、ちょうどその対岸には一本の谷筋がまっすぐとヒンドウクシュの山々の中に入っているからである。この谷筋を登りつめ、イストラグ峠を越えるとパキスタンのチトラルに至る。ここに立てば、カーカー城は主に南方からの侵入者を迎え撃つために建てられたことが分かる。

カーカー城は南斜面がパンジ川に突き出た岩塊の尾根筋にそって建っている。この岩塊は背後のテラス状段丘から800mも離れていて独立している。東西675m、南北220mであり、二重壁が張り巡らされている。56個の円塔がある。

シタデリを囲む防壁は等高線をなぞるようにして築かれている。内部の空間は最も広いところが50m×40mの広さで、中には壁で仕切られた小部屋が数室残っている。スタインはこのシタデルの中で赤い土器の破片を数枚見つけ、また当時この遺構で見つかった鉄製の矢じりを見せてもらっているが、このことからスタインはカーカー城が敵の襲撃を受けた際の避難所ではなかったかと推測している。ババエフの考古学的調査によってその建設された年代は前3-後7世紀に比定された。(『アイハヌム2012』66頁)

カーカー城の由来について

オルフセンは1896年から2年近くにわたってワハン下流部の住民の宗教や生活に関する聞き取り調査を行っている。そして上述の著書の中で、カーカー城の由来について次の民間伝承を伝えている。この



ヤムチュン・フォートからヤムチュン川の河口を望む

城の城主、カーカーは反イスラムで強力な権力をふるったシアポシュ族の首長として、長年ワハン全域を支配していた。しかしイスラム聖者のハズラット・アリが彼を撃退すると、カーカーは異教徒の国、カフイリスタンへと逃亡した。ハズラット・アリの廟はカーカー城のすぐ北側にある。

オルフセンはこのシアポシュに関して多くの紙面を割いているが、スタインはその記述を一笑に付している。しかし、19世紀末、ヌリスタンを中心としたアフガニスタン北東部はまだ完全にイスラム化していなかったということを考えると、オルフセンが現地での聞き取り調査で得た情報を完全に無視することはできない。

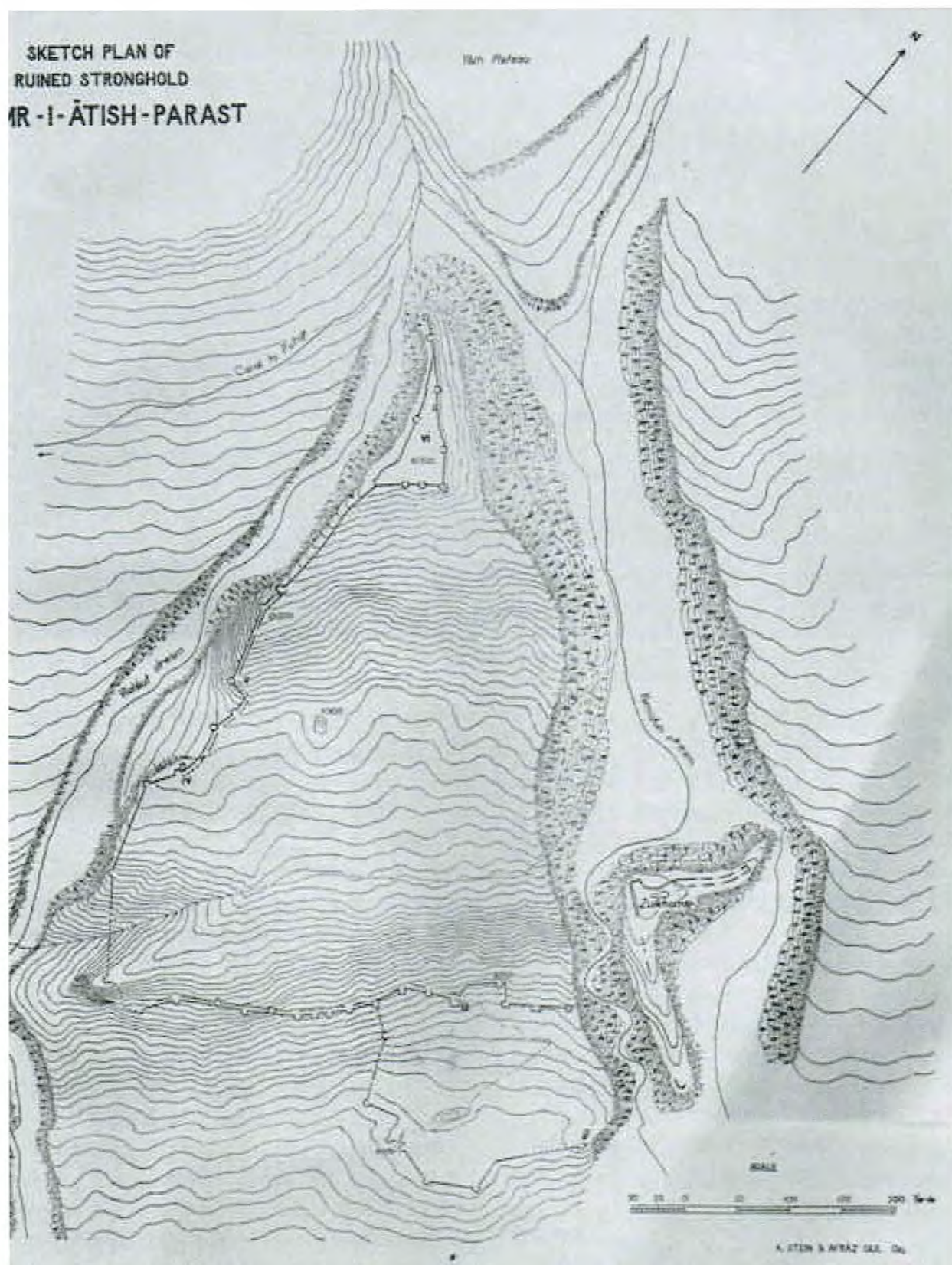
実際、ヌリスタン地方など、アフガニスタン東部周辺がアフガニスタンの国王、アブドウル・ラーマン・カン (Abdur Rahman Khan) (在位 1890-1901) によって強制的にイスラム教に改宗させられたのは1895年である。またワハン周辺の地域が非イスラム

教徒の国だったことが以下のようないくつかの文献からも知ることが出来る。

アフガニスタン北東部の異教徒について残っている最も古い記録の一つが、チムールの自伝とされる“Malfuzat-i Timuri”1399 である。その後、ムガール王朝を築いたバーブル大帝は1514年、その回想録『バーブル・ナーマ』の中で、現アフガニスタン北東部の征服に当たり、「ワインを飲む」異教徒の援助を得たことを記している。

1603年に中国を目指してワハンを通過したことがほぼ定説になっているイエズス会の神父、ベネディクト・ゴエズ (Benedict Goes) は酒を飲む、黒い衣服をまとったシアポシュという部族について記録を残している。 (“Transactions of the Bombay Geographical Society” Vol.5, p.40-p.44, 1809より)

近年になると、1808年にエルフィンストン (Mountstuart Elphinston) 率いる大英帝国使節団がカーブルを目指し、その使節団の本体は結局ペシャワ



ワルより先、アフガニスタン領内には入らなかったものの、インド人団員がヌリスタン地方を視察した。エルフィンストンの報告書 “An Account of the

下 ヤムチュン・フォートのプラン。1915年のスタインの調査によるもの。

Kingdom of Caubul” の付録Cに当時のヌリスタンの



ヤムチュン・フォートの上部。背後の山はアフガニスタンのヒンドークシュ山脈。フォートとヒンドークシュとの間をパンジが流れる。左奥にはワハンの谷の上流部が見える。

様子が記録されている。

ジョージ・ロバートソン (George Scott Robertson) は 1890 年、パキスタンのチトラルから現在のヌリスタンに入り、一年間シアポシュを含む各部族の言語、生活、宗教などについての現地調査を行い "The Kafirs of the Hindu Kush" 1896 を出版した。この本がヌリスタン地域に関する最初の包括的な報告書となったが、オルフセンのシアポシュに関する記述の多くはこの本によっても裏付けられている。

ワハンはヒンドークシュ山脈に隔たれているとはいえ、現パキスタンのチトラル地方を含む北西辺境州やアフガニスタンのヌリスタン地方と隣接していて、これら地域との接触が今でも盛んである。たとえば、現在アフガニスタンで栽培製造されているアヘンの多くは、ワハン回廊を経由してタジキスタンからモスクワに流れている。

中央アジアが急速にイスラム化したころ、現在のイラン方面からイスラム教徒に追い払われた拝火教徒がワハンに逃げ込み、また仏教がアフガニスタンのからワハンに普及した可能性を考えると、19 世紀末までかたくなにイスラム教を拒んだアフガニスタ

ン北東部の異教徒カフィールの祖先がワハンを襲撃し、あるいは一時支配下に置いていたことが十分に考えられる。

オルフセンはワハン右岸の城塞施設の殆どがシアポシュ族によって建てられたと書いているが、私が 2005 年と 2006 年ワハンを訪れた際、直接現地の住民に聞いた話としては、かつてはワハンは常にその背後の山々から敵の攻撃に曝されていた、そして敵の襲来があった時、ワハンの城塞施設からは狼煙を順々に上げることが習わしとなっていたと。

なおオルフセン、その他の文献によれば、ヌリスタン地方に住む異教徒の部族は大まかに黒い山羊の毛をそのまま纏うシアポシュと白い服を着るスペド・ポシュに分かれていたという。両者は言語、習慣が異なる。カフィール (異教徒) は体格は大柄で、肌の色が白く、目が青い。根拠は全くないが、アレクアンダー大王率いるギリシャ兵士の末裔であるという説もある。実際ワハンを旅行していると西洋人のような金髪碧眼の人を見かけることもある。

ヤムチュン・フォート

カーカー城から東へ進むと、川岸を走る道路は大量の砂や大きな岩が堆積している区間を通過しなければならない。ここからパンジ川は狭まり、ダルシャイ村付近までは轟音をとどろかせるほどの激流になる。ところがカーカー城から57km東のヤムチェン村に近づくと、川幅が広がり、上流への視界が一気に広がる。

ヤムチェン村は平地が少なく、段丘の上に建つ大変美しい村である。九十九折りの坂を5km、高度500mほど登るとワハン最大の城塞、ザミール・イ・アタチシュ・パラスト (Zamri-i-atish-parast、通称ヤムチュンフォート) に至る。この城は東側にはヤムチュン川に、その西側をヴィチクト川に挟まれた三角形の枝尾根上に位置している。この枝尾根の先端はパンジ川へ向かって険しく落ち込んでいるので、その稜線沿いに建つ塔や防壁が一層高く聳っているように見える。一方この枝尾根の背後北側にはヤズ (ワヒ語で雪原という意味) の台地が広がる。ここにソ連時代に建てられた温泉サナトリウムとビビ・ファティマの洞窟温泉があり、これを目当てに旅行者は必ず立ち寄る場所である。

すっかり整備された道路から、城塞の北端、もっとも標高が高い位置に建っている内城がある斜面を登り城壁内部に入ると、四方を防壁にすっぽり囲まれた空間がある。そこから銃眼を覗くと息をのむような素晴らしい眺望が目の前に広がる。東北方向にシャフダラ山系のマルクス峰・エンゲルス峰と東南方向のヒンドウクシュの峰々に挟まれたワハン東部の雄大な景観が広がる。ここはワハン随一の景勝地である。

枝尾根はヤムチュン川の河口付近まで伸びている。その麓から約300mほど登ったところに城の南端の入口と思われる開口部がある。まだ道がなかった時代に、スタインは枝尾根の麓からこの入り口まで直登し、城塞内に入った。そこで彼は次の光景を見たのである。

入口の両側には塔があり、防壁が二重に張り巡らされている。厚さが1.2m、高さが3.3mの最も外側の壁は入口から北東方向に延び、ヤムチュン川に落ち込む垂直の崖の上で終わる。城の東側は全長に渡って、ヤムチュン川の深い峡谷を見下ろす絶壁となっ

ているので、この区間は防壁を築く必要がない。いわば天然の城塞となっている。

一方、上記の外壁は入口から北西方向にも延び二列目の城壁に突き当たる。この間丸い円塔がいくつもある。直径が4m、壁厚が2mである。日干し煉瓦でできた円塔は地面から1mの高さがある自然石を積み上げた基礎の上に建つ。城壁には複数の穴があるが、その形状から類推すると鉄砲ではなく弓矢で敵を攻撃するための銃眼であることが分かる。

スタインが城塞の入口から踏み入れたのは南北と西側の三方だけが防壁に囲まれている空間であった。二列目の防壁にも出入り口があり、その付近には無数の小部屋があったことから、スタインはここが兵士の居住区ではなかったかと推論している。

ちょうどヤムチュン川を挟んだその対岸には孤立した岩山があり、その頂上には20ヤードほどの広さを持つ小さな城塞跡、ズルコマル (Zulkomar) があるとスタインは記しているが、私は残念ながら確認することが出来なかった。

二列目の防壁はスタインが入った入口の外壁より北側に位置している。ヤムチュン川峡谷を見下ろす崖の上がその起点である。防壁は南西方向に412mの距離にわたって枝尾根を横切り、傾斜が急な小山に向かって急登し、その頂上に立つ巨大な塔に突き当たる。防壁の厚さは1.5mであり、そして3m間隔に銃眼があり、この間、直径4mもある17本の円塔によって補強されている。防壁は塔が建つ小山を高巻きし、ここから城塞の西側を流れるヴィチクト川の谷に沿って向きを北北西に転じ、しばらくは楕円形の陥没地に沿って進む。途中非常に保存状態の良い直径が5mの塔がある。この楕円形の窪地を囲む城壁と円塔は三角形の穴で装飾されている。

この地点はスタインが入った最初の外側の入口から183mほど高い場所にある。防壁はこの塔から直線ですらに122mほど山の斜面を登り、城の最北端にある三角形の内城であろう囲いに突き当たる。(注: まさに私は自動車道路からこの内部へ東側から入ったのである。)

内城を囲む防壁は自然石を積み上げ漆喰で固めたものである。ここからツイタデルは、北へさらに



ゾング村の拝火教神殿跡といわれるところ

119mほど北へ伸び、最高地点に達し、崖の上で終わる。

北背後の山から流れ出たヴィチクト川は落差 40m の崖に突き当たり二つに分岐して、枝尾根を東西両側から浸食したからここは三角形の頂点となる。流路が分岐したヴィチクト川は片方がより東にあるヤムチュン川に流れ込み、もう片方は西のプツプ村用の水路として引き込まれている。そのため現在は枝尾根の西側を流れていた川はほぼ枯渇し、その河床は深い谷になっている。

『アイハヌム 2012』によれば、ソ連の考古学者ババエフはヤムチュンで墓地を発掘し、多くの遺物を掘り当てた。そしてその土器、金属製品、装飾品、副葬品などの特徴から、エフタルの墓地と比定したが、エフタルと城塞跡の関係については何も述べていない。一方 1838 年に西洋人として初めてワハンに足を踏み入れたジョン・ウッドは、ヤムチュンフォートが「火を信仰する異教徒によって建てられ

た城である」という現地の住民の証言を記録している。

スタインはこのウッドの記録と城の名前、「ザミール・イ・アタチシュ・パラスト」から拝火教徒の城ではないかと書いている。さらに ①城塞設備が大変堅固に建てられ、大規模であることからワハンでは現在よりも人口も資源も多かった時代があった。②バダフシャン地域とターリム盆地との間の交易が支配者に富をもたらした。③ そして古代ワハン王国の首都、ハンドウートがちょうどこの城跡の対岸にあることから、背後のシャフダラ、シュグナン渓谷方面から襲撃された時に城内に避難したと。スタインはこのように仮説を立てたのである。ハンドウートについては次のヴラングの項で紹介する。なお、ランガルに近いゾング村にも大規模な拝火教神殿の遺構が見つかっている。

ヴラングの仏教遺跡

ヤムチュン村から 9.6km 東にヴラング村がある。



ヴラング西側の洞窟群

村から西へ約 1 km 離れた礫岩の垂直の崖に、20m ほどの洞窟が上下三層に掘られている。崖の高さは約 100m で、ヴラング川を見下ろす位置にある。一番上層の洞窟は崖の下から約 50m の高さであり、かつては上下の洞窟を行き来するための細い木柱を重ねて出来た通路が掛けられていたが、現在は無い。オルフセンが調査した 1896 年頃にはまだ村の貧し

い人々が洞窟の中で生活をしていた形跡が残っていた。スタインの聞き取り調査によると、かつて村がアフガン兵や大パミール川上流部のキルギス遊牧民から襲撃された時、村人は家畜と女性を洞窟の中に避難させたという。

左下 ヴラングの仏塔らしい遺構。上段は近年村人が積んだもの。さらにその上に「仏足石」が載っている。

下 左の写真のある台地を下から見上げる





ランガルの岩絵

この垂直の崖はヴラング川の西に位置しているが、川を挟んだ東側にもその基部が垂直に立ち上る岩山がある。山の険しい崖をよじ登ると稜線が広く、勾配が緩い斜面となる。尾根に出てまず目に付くのが数段の四角い建造物である。その建造物の最上層には、観光客を呼び込むためか、不細工な「仏足石」が掘られた石版が置いてある。村人に「仏足石」の由来を聞くと、背後の山を捜せば「仏足石」がいくらかでも出てくると答えるので本当に呆れてしまう。

この遺構の最上部は見た目が真新しい。その建造物の近くにはもう一つ四角い基壇らしきものがあり、その周辺を囲む建造物の残骸と思われる石が散乱している。この遺構のある山の西面にも洞窟群があり、ヴラング川を見下ろしている。ちょうど山に突き当たった北西端に小さい城塞跡があり、砦が建つ山の斜面をくりぬいた階段を登ってみると崖の真下にヴラング川が激流となって狭いゴルジュから平野へ流れ出ている場所であることが分かる。砦から今度は川面まで下り、用水路にそって、川を遡ると、高い崖が両側にせまり、川は滝のような轟音をとどろかせていた。

ヴラングの遺跡については加藤九祚著、『中央アジア

北部の仏教遺跡の研究—シルクロード学研究 Vol. 4』1997 P.74 にブブノワ博士を長とするタジキスタン科学アカデミー・パミール考古学調査班の報告の概要が紹介されている。その報告によれば、ヴラングは古くから拝火教神殿と仏教の僧院があったと信じられているが、学者の間では仏教系の遺跡かどうかについては意見が分かれているようである。

ところで、オルフセンは上記の洞窟群しか視察していない。またスタインは洞窟群とヴラング川を見下ろす城塞跡を調査し、見取図まで作成しているにもかかわらず、現在のはもっとも目立つこの四角い建造物については何も書いていないが近年までその四角い建造物は土の中に埋もれていたのであろうか。

ハンドゥートについて

ワハン下流部ではある時期、仏教が広く受け入れられていたことを示唆する岩絵や仏塔らしき建造物はほかにも見つかっている。ランガルの6000に上る岩絵の中にも仏塔らしいものが見つかっている。またスタインはヤムチュンフォートの調査を行った際、村の長老から対岸のハンドゥートには仏足石があるという証言を得ている。

上述したように、玄奘は『大唐西域記』の中で、

達摩悉鐵帝(ワハン)の首都が昏駄多(Khandut)であると書いている。その一節の中で伽藍があったことも書いている。玄奘の昏駄多を現在のハンドゥート村と最初に同定したのはスタインであるが、その理由は村の規模が大きいこと、20世紀初めには行政の中心地であったこと以外にも、村には古いイスラム聖者廟があることを根拠にしている。(スタインは長年の発掘経験から、ある地域の宗教が変わっても、同じ宗教施設が代々引き継がれるという説を唱えた)

ヤムチュンフォートの高みからは対岸の聖者廟は林に囲まれているので、スタインは直接遠望することは出来なかったものの、廟を取り囲むように建っているドーム状のクルガン(墓)を確認できたのもその言説の根拠となっている。("Innermost Asia")

ハンドゥート村には仏教の伽藍らしきものがあつたことは中世のアラビア資料からも知ることが出来る。943年に完成したペルシア語で書かれたイブン・ハウカルの地誌『道程と諸国への旅』にはワハンについての一節がある。その中で、イシュカシムがワハンの中心地であり、ハンドゥートにはワヒ族の「偶像崇拜の寺院」があり、その左側には「チベット族に占領された城塞がある」と書かれている。(Minorsky, 121, "Shrine Traditions of Wakhan Afghanistan", John Mock)

スタインも、オルフセン、そして戦後のロシア考古学隊もハンドゥート村を直接調査していないが、最近カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の講師(南アジア言語学)であるジョン・モックは2004年から2007年に掛けてワハンの右岸と左岸の両側を数回にわたって踏査した。上記2011年発表のイスラム宗教施設に関する報告書はその成果の一つである。ジョン・モックはワハンの岩絵や建造物、碑文などに関する調査報告書「New Material on the History and Culture of Afghanistan's Wakhan Corridor: Rock Art, Monuments and Inscriptions on the Silk Road, 7th -9th c.」を国際会議で発表しているが、今後このワハンに関する最新の調査結果が出版されることを大いに期待したい。

最後に

以上ワハン下流部、パンジ川の右岸に残る城塞跡について、主にスタインの調査の内容を紹介した。タジキスタンはソ連崩壊以降、5年間の内戦を経て、

現在ようやく落ち着きを取り戻している。こうした中、財源不足のためか1980年代以降ワハンの考古学的調査が中断しているようだ。まだまだ未解明で謎の多いワハン下流部の城塞史跡の歴史に光を当てるべく、今後の調査の再開に期待したい。

ソ連の考古学者ベルンシュタムは土器などの出土品からワハンでは城塞建設は前3世紀から紀元6世紀までの間は不断に続いたと述べているが、『アイハヌム2012』)城塞施設が語りかるワハンの歴史については、おおよそ次のことが言えるのではないか。

中央アジアが急速にイスラム化した8世紀頃、古代ゾロアスター教徒が東部イラン方面から追われ、アフガニスタン東部、チトラル、そしてワハンの山岳地帯に逃げ込んだ。ワヒ語が東部イラン語に近いことからこのことが類推できる。一方、9世紀以前はインド・現パキスタン方面からもたらされた仏教も栄えていた。マニ教やネストリウス派キリスト教もワハンを通じて、ターリム盆地へもたらされたかもしれない。10世紀になってアフガニスタン東部やワハン一帯にイスマイル派イスラム教が広がると、ヌリスタンなど、一部の地域は激しく抵抗し、19世紀末までその受容を拒み続けた。

一方、ワハンでは様々な宗教の影響や、土着信仰を織り交ぜた独特のイスマイル派イスラム教が発展した。今なおワハンの人々は火を神聖視し、また神を象徴する人形や皿、その他の偶像に向かって礼拝すると聞く。また携帯用小型仏塔らしき形をした石がイスラム聖者廟にささげられている。拝火教寺院や仏教寺院とされる施設の多くはイスマイル派の宗教施設の近くで見ついている。このように、辺境の地ワハンはただ単に風光明媚であるばかりでなく、シルクロードの歴史が凝縮された場所であるがゆえに、限りなく魅力的である。

参考文献

1. 加藤九祚 アイハヌム2012 東海大学出版会 2012年12月
2. 加藤九祚 中央アジア北部の仏教遺跡の研究 シルクロード学研究 Vol.4 1997 シルクロード学研究センター
3. 玄奘 大唐西域記 水谷真成訳 中国古典文学大系22 平凡社1979年11月
4. O. Olufsen "Through the Unknown Pamirs" The

- Second Danish Pamir Expedition 1898-1899
1904, Greenwood Press Publishers New York,
1969
5. Sir Aurel Stein "Innermost Asia" Detailed Report
of Explorations in Central Asia, Kan-Su and Eastern
Iran Vol. 2 1928, Reprint Cosmo Publications
New Delhi- India 1981
6. Sir Aurel Stein "Serindia" Detailed Report of
Explorations in Central Asia and Westernmost
China Vol. 1 1921, Reprint Motilala Banarsidass ,
1980
7. George Scott Robertson "The Kafirs of the
Hindu-Kush" 1896, Reprint Munshiram Manoharlal
Publishers Pvt. Ltd. 1998
8. John Mock, "Shrine Traditions of Wakhan,
Afghanistan." Journal of Persianate Studies,
(2011) 117-145, [http://www.mockandoneil.com/
shrinesjps.pdf](http://www.mockandoneil.com/shrinesjps.pdf)
9. Transactions of the Bombay Geographical Society
Vol.5, .p.40-p.44, 1809

オクスス学会規約

1 基本方針

- (1) 会の運営は簡素を旨とする。
- (2) 会員・理事その他の者が会のため職務を遂行する場合、無報酬とし、職務遂行に要する費用は原則として自己負担とする。

2 組織

- (1) 理事7名を置く。会の運営は、理事会が理事の過半数で決定する。
- (2) 会の事務所を下記に置く。
〒154-0016 世田谷区弦巻5-22-16 日景啓子方
- (3) 事務局員1名を置き、その職務は下記の通りとする。
 - ① 会の金を郵便貯金口座に保管する。
 - ② 会員からの年会費を収納する。
 - ③ 会員の入退会を受けつける。
 - ④ 会員との間で e-mail による連絡を行う。

3 会員

- (1) 誰でも入会できる。
- (2) 会員はメールアドレスを事務局に届ける。
- (3) 年会費は金3000円とする。会員は毎年の会費を3月末までに納入する。

4 会の活動

- (1) 少なくとも年に一度、濃密な研究発表会と盛大な懇親会を開く。
- (2) 原則として年に一度、紀要を発行する。

ご入会手続き ご案内

- 1 オクスス学会事務局宛てに、下記書式によりご連絡ください。

住所 〒154-0016 東京都世田谷区弦巻5-22-16 日景啓子 方
メールアドレス：oxus@s09.itscom.net

- 2 ご入会手続きの書式

オクスス学会に入会します。

- (a) あなたの氏名・住所：……………
- (b) あなたのメールアドレス：……………
- (c) (もしあれば) ご意見など：……………
- (d) 主な関心：……………
- (e) (研究者の場合) 専攻と所属先：……………

オクサス学会へのいざない

万年雪におおわれた世界の屋根の国、
深い透明な湖と満々たる濁水の国、
炎暑の砂漠と果てしないステップの国！
お前は自らの数千年にわたる歴史の中で多くのことを見た、
お前の山々や石や廃墟は多くのことを語ることができる。

お前の大地はわずか百年前世界に開かれ、
お前の忘れられた都市が語りはじめたのはほんの数十年前にすぎない。
古い国よ、世界はお前の言うことに耳をすましている、
あたかもエジプトのピラミッドや聖者の丘、
あるいはラティウムやギリシアの廃墟、イースター島の巨人に対するように…。
中央アジアよ、私たちはお前に聞き入るのだ！

この詩的文章は、中央アジアの文化研究に生涯を捧げた数多い学者のひとり、ロシアの考古学者・東洋学者B・Y・スタヴィスキー(1926-2006)が一般向きの著書『ロクサーナとチムールの国』の巻頭に書いたものである。

われわれがここに立ち上げる「オクサス学会」の「オクサス」は、中央アジアを東から西へと貫流する大河アムダリヤの古名であるが、われわれはこれを広義の「中央アジア」の象徴として選んだ。パミールの氷河に発して砂漠に消える{オクサス}は、人類の波乱に富んだ歴史を映しているだけでなく、一個の人生の象徴にもなり得る。われわれは中央アジアを焦点とするこの学会での研鑽を通じて、人類文化の奥深さを知り、文化を尊敬する魂を育むと同時に、世界と人生の偉大さと美しさ、そしてロマンを感得しようとするものである。研鑽の対象には中央アジアとこれに関連する隣接地域の過去と現在、自然と人生の一切が含まれる。オクサス学会は門戸を大きく広く開くものとする。会員は国籍を問わず誰でもなることができる。文化活動のジャンルも問わない。

友よ、来たれ、オクサス学会へ、ともに夢をひらこう。

2009年12月11日

加藤九祚
前田耕作
古曳正夫



オクサス学会紀要 2
2014年8月24日発行
発行：オクサス学会
事務局：〒154-0016 東京都世田谷区弦巻5-22-16
日景啓子 方
e-mail : oxus@s09.itscom.net